
憧れのダイヤモンド

あめこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憧れのダイヤモンド

【ZPDF】

Z0997D

【作者名】

あめい

【あらすじ】

野球好きの父の影響で野球を始めた“たまの”。次第に野球の虜となつた。しかしある日重大なことに気付いてしまう。それはそれまでの世界を反転させるような、理不尽な事実。野球に魅せられた少女が、自分自身の『野球』と向き合つ物語。

(前書き)

この話は、表現上空白行が多数入ります。
ご了承下さい。

では、どうぞ本編をご覧下さいませ。

あたしが夢見たこと。

それは、『男になること』。

何故かつて？

……野球がやりたかつたから。

焦がれ続けた。あのダイヤmondの中に。そこで動き回るゴーフ

オームに。飛び交う白球にさえも。

追いかけたけれど届かなかつた、ダイヤmondに。

妬んでいたのかもしれない。あたしはあの中にはもう入れないから。

するい、と。

憧れたダイヤmondは遠く、いくら手を伸ばしたって届かない。

あたしは諦めるしかなかつたんだ。

あたしの父は無類の野球好きで、仕事から帰つてくるとテレビにかじりついてプロ野球を見、休日になれば草ソフトボール（あたしの地域には草野球チームが無くて、父は泣く泣くソフトボールのチームに入つた）に出かけていくような人だった。

そんな人が自分の息子とのキャッチボールに憧れないわけがない。あたしの母が身ごもつたと知つた時は父はそれはそれは喜んだといふ。ただし、あたしが生まれるまでは。

母は、「生まれるまでの楽しみに、性別は言わないで下さい」と医者にお願いした。父もそれに賛成した。なぜならあたしが「男」だと信じて疑わなかつたからだ。

しかし生まれてみて仰天したそつだ。あたしを取り上げた後、医者が分娩室の外で待つていた父（父は出血が苦手で、見ると卒倒するのだ）に告げた言葉……。

『おめでとうござります。可愛い女の子ですよ！』

それを聞いた瞬間、父はかなり呆然と立ち尽くし卒倒してしまつたらしい。今でも母が笑い話にしているくらいに。

憧れていた「息子とのキャッチボール」。しかし現実は甘くなかったわけだ。

……けれど父はしづとかつた。なんと、あたしに野球をやらせたのである。

「たまの、お前は男女の壁を破るんだぞ！」

という文句と共に。当時純真無垢だったあたしは、

「分かつたーー！」

と勢いよく答えていた。これはいつの間にか父の野球毒に浸食されていたためである。

名前のせいもあるかもしれない。「たまの」という名前は、“野球”を逆さまにして訓読みしたものなのだ。

小学1年生から地元の少年野球チームに入り、毎日素振りとランニング、父とのキャッチボールをやり、髪の毛はもちろんベリーショート。試合に負けたときは坊主にしたことだつてある。これには

監督が田を丸くしていた。

「たまの……お前、そこまで……」

と言つて、監督はこの後男泣き。チームメイトからは「監督を泣かせた女」として賞賛されたのだった。ちなみにその後監督には「頼む、坊主にだけはしてくれるな」と懇願され、それ以来坊主にはしていない。監督にも娘さんがいるみたいで、どうやらあたしの坊主姿を娘さんと重ね合わせてしまつたみたいだった。

5年生頃になると、いきなり身長が爆発的に伸び、それまで148センチだったにもかかわらず、一年で165センチまでになつた。同級生の男子よりもでかくなつてしまつたあたしは多少傷ついたのだけれど、普段からの練習で細身、しかも男顔だったため、女子から「たまのお姉様」と宝塚のスターのように憧れの的にされた。

それはちょっとと氣分が良かつた。

廊下を歩いていれば「きやー」、テストで100点を取れば「きやー」、あいさつをすれば「きやー」、体育で転んでも「きやー」。あたしの行く先々では必ず黄色い声が上がり、ファンクラブができる、バレンタインなんか下駄箱がチョコで一杯になつた。

あたしは乙女として複雑な思いを抱えつつも、まあそれなりに楽しいし書はなかつたので普通に生活していた。ちょうどその頃試合でホームランを連発してもいたし、すこぶる調子と機嫌が良かつたのだ。

そんな時、事件は起つてしまつた。

こつものよつて試合を終え、チームメイトと帰りつとじていた時だつた。

その試合は隣の市のチームとで、細つこいもやしみたいなピッチャーから繰り出される速球が圧巻の一言。あたしの気分は高揚した。

チームメイトが速球に苦しみ切れる中、

「んな奴がいるんだ。あたしも、負けたくない。

そう思つて打つたところ見事ホームラン。

試合には負けたけどモチベーションは上がって、家に帰つたらいつもみつめが多くトレーニングしようとがんばりつけていた。

荷物をセカバンに詰めて、さあ帰らつと腰を上げた、まさにその時。

あいつは現われた。

それはあのもやしつ「ペッチャー」。

「あ、あの……」

遠慮がちにあたしに話しかけてきたそいつは、あたしょっちせんちくらいでかかつた。そこは気に入らなかつたけど、左目の下に泣きぼくろが二つあるその顔は割といい方で、頬がちょっと染まつたのが分かつた。

「…………何」

でも「おひるね」を返す。だってチームメイトがこせんでながら見ていて恥ずかしかつたのだ。

「いや、あの、えっと……」

「何。おひるねと言こなよ」

「…………」

もやしつ「」ピッチャーは黙り、喉を「ぐん、ヒュード」させた。よく分からなかつたが緊張しているみたいだつた。そして意を決したように話し始めるそいつ。

「…俺、ずっと自分の球には自信があつたんだ」

「…は？」

口に「」が出てなかつたものの、内心「なんだ」「いつ」「って気持ちで一杯。

「小1から野球始めて、ピッチャーになりたくて、練習続けてやつと成果出で…。レギュラーになつてから、一回もホームラン出されたことなかつたんだ」

「ああ、なるほど。」

つまり自分の球に自信があつたのに、しかもホームラン打たれたこと無かつたのに、今日あたしが豪快にホームランをかつ飛ばしたから、腹が立つたわけだな。そして抗議にきた、もしくは喧嘩してきた。・・・それにしては随分弱腰だけど。

「喧嘩なら買ひナビ？」

ちよつと強めに言つ。喧嘩は男子にだつてなかなか負けない。

「え？ けんか…………つて違えよー。そういうじやなくてー。」

「はあ？ じゃあ何だつていうんだよ」

「俺…………お前に惚れたんだ！」

「…………は？」

今度は思わず口に出して言ってしまった。

「お前のスイングに惚れたんだ！あんなに豪快にかっ飛ばされたの初めてだった。す」「いつて思ったんだ。でさ、はじめはびっくりしたんだけど、お前の顔見てもつとびっくりした。だって女だつたんだから…………し、しかも、その…………び、び美人で……っ」

「…………」

今度彼はトマトみたいに真っ赤になりながらそう言つた。ついでにあたしも真っ赤になつて、見ていたチームメイトからは「ひゅー！」という歓声と口笛があがつた。

美人なんて言わたことがなかつたし、照れたけど、嬉しかつた。スイングを認めてもらえたことも嬉しかつた。

あたしはその瞬間心臓がビくびくし始めるのを聞いていた。

「だからさ、お前のこと好きになつちゃつたんだ。あの、その、だから付合へ合つてつていうんじゃないけど、えつと…………」

彼は再びそこで黙りこみ、直後満面の笑みをあたしに向かつて浮かべたのだ。

「また野球やるうつなー！」

「…………うん」

「中学行つてもやううな、絶対。で、大人になつても」

「……うん」

「へへ、良かつた」

私がうなづくと、彼は本当に嬉しそうに微笑んだ。いつそう心臓がどぐどくと鳴る。

「なあ、名前聞いていい? メンバー表見られなかつたんだ」

「え? ああ、うん。たまの。如月たまの」

「俺は荻原孝文。じゃあ、またな、如月!」

そうして荻原は言うだけ言って自分のチームメイトの元へ帰つて行つた。

あたしはその後ろ姿をぼんやり眺めていたけど、堰を切つたようにチームメイトが騒ぎ始めたからそれどころじやなくなつた。

人生初めて告白されて、嬉しくならないはずがない。

私はその夜家に帰ると、リビングでソファに座り野球を見ていた父に、そのことを報告したのだった。

「お父さんーあたし、告白されたのー！」

「ふーんそーかあ良かつたな…………って、は、告は……何いいい……?」

「凄い速球。ピッチャーにーあのね、あたしのスイングに惚れたんだつてー今日ホームラン打っちゃったんだよ、そこいつの球」

「おいたまの…、ちよ、待て」

「でね、そいつ……あたしのこと美人だつてーーービハビナウーーー」

「しかも口説いたのかーーーたまの、ソラソロと落ち着いてそこに座りなさいーーー」

「・・・」

そこまで調子よく喋っていたけれど、いきなり父が大声を出したから、あたしは素直に指定された場所に座つた（父の隣）。

「…で、たまの。あと何を言われたんだ？ん？お父さん…怒らないから…正、直に…ひ、ひ、ひひ…ひ」

「え、何で泣くの？」

またいきなり泣き出した父。あたしは父の奇行に口を開けるばかりだった。

するとちよづじかに母がやつて來た。

晩ご飯の準備が終わつたみたいで、あたし達を呼びに來たんだろう。

「お父さん、たまの、『ご飯…』ってどうしたの？」

「お母さん。いや、なんかあたしが今日出でられたつて言つたらお

「あら重症ね」

「ああ……う、たまの……あんまり露骨に……ひっく、嗚咽んじやありません……つづ…」

「あら重症ね」

「びつじょう…」

「まあいいわ。何、たまの歴史されたの?ちょっとお母さんに詳しく述べせてよ」

「うん、それがね……」

父に書いたのと回りじことを母にも書いへ。母はさすが女性なだけあって、田を輝かせながら聞いてくれた。

「美人なんて言われたの、あんた。やつたじゅーん!」

と喜んでてくれた。思わず照れ笑い。すると父がまた泣いたんだけれど。

「で、続きは?」

父が泣き始めたためにそびれていたことを、あたしは話し始めた。

「うん。それであいつね、『また野球やるうな』って言つてくれたの。そこで、中学行つても、大人になつてもやるうな、つて!」

その瞬間、父が泣くのを止めた。

「あら重症ね」

「ああ……う、たまの……あんまり露骨に……ひっく、嗚咽んじやありません……つづ…」

「あら重症ね」

「びつじょう…」

「まあいいわ。何、たまの歴史されたの?ちょっとお母さんに詳しく述べせてよ」

「うん、それがね……」

父に書いたのと回りじことを母にも書いへ。母はさすが女性なだけあって、田を輝かせながら聞いてくれた。

「美人なんてと言われたの、あんた。やつたじゅーん!」

と喜んでてくれた。思わず照れ笑い。すると父がまた泣いたんだけれど。

「で、続きは?」

父が泣き始めたためにそびれていたことを、あたしは話し始めた。

「うん。それであいつね、『また野球やるうな』って言つてくれたの。そこで、中学行つても、大人になつてもやるうな、つて!」

その瞬間、父が泣くのを止めた。

「あら重症ね」

「ああ……う、たまの……あんまり露骨に……ひっく、嗚咽んじやありません……つづ…」

「あら重症ね」

「びつじょう…」

「まあいいわ。何、たまの歴史されたの?ちょっとお母さんに詳しく述べせてよ」

「うん、それがね……」

父に書いたのと回りじことを母にも書いへ。母はさすが女性なだけあって、田を輝かせながら聞いてくれた。

「美人なんてと言われたの、あんた。やつたじゅーん!」

と喜んでてくれた。思わず照れ笑い。すると父がまた泣いたんだけれど。

「で、続きは?」

父が泣き始めたためにそびれていたことを、あたしは話し始めた。

「うん。それであいつね、『また野球やるうな』って言つてくれたの。そこで、中学行つても、大人になつてもやるうな、つて!」

その瞬間、父が泣くのを止めた。

「あら重症ね」

「ああ……う、たまの……あんまり露骨に……ひっく、嗚咽んじやありません……つづ…」

「あら重症ね」

「びつじょう…」

「まあいいわ。何、たまの歴史されたの?ちょっとお母さんに詳しく述べせてよ」

「うん、それがね……」

父に書いたのと回りじことを母にも書いへ。母はさすが女性なだけあって、田を輝かせながら聞いてくれた。

「美人なんてと言われたの、あんた。やつたじゅーん!」

と喜んでてくれた。思わず照れ笑い。すると父がまた泣いたんだけれど。

「で、続きは?」

父が泣き始めたためにそびれていたことを、あたしは話し始めた。

「うん。それであいつね、『また野球やるうな』って言つてくれたの。そこで、中学行つても、大人になつてもやるうな、つて!」

その瞬間、父が泣くのを止めた。

「あたし嬉しくてね、『ひる』って約束したんだ。だからこれからもひとつ練習してあいつと大人になつても試合したい！ね、いいでしょ？」

「素敵じゃない。ね、お父さん」

母が同意を求めるとい、父は、何故か顔を歪ませた。

「・・・お父さん？」

「たまの、中学からは野球ができないんだ」

突然のことに思わず固まってしまった。

お父さんはいきなり何を言い出すんだか、と、しばしばしてやつとやう思えた。

「・・・何言ひしの、お父さん」

「ソフトボールならできるだ。じりじりも野球つてんなら高校でマネージャーは大丈夫だと思ひな」

「待つて、待つてよ。ソフトじゃない。野球だよ？それにマネージャーだなんて言つてない。あたし、試合するんだよ」

「それはできないんだよ」

「何でー？嘘だ！」

「お前は小学校で野球を・・・やめないといけないんだ」

「なんで・・・？」

泣きそうになりながらさう訊くと、父は益々顔を歪めた。
野球に疎い母でも父の言いたいことが分かつたらしく、沈痛な顔
をした。

「お前が女だからだ」

瞬間、あたしの世界は反転した。

女は野球ができない。

小学校までしかできない。

女が野球をやることは許されない。

もう、荻原と野球ができない。

そう理解した途端に、あたしは悲しみよりも怒りを感じていた。
ソファから立ち上がり、放り出していったセカバンを拾い上げると、
ドアを開けて力任せに閉めた。

ドアからはバンッ、という大きな音が出たけれど、あたしの口か

らは小さな嗚咽がもれるだけだった。

唇を噛みしめて、涙が零れるのを天井を向いて我慢する。
そこでは泣きたくなかった。

あたしはセカバンを抱え、家を飛び出した。ゴーフォームのまま。
そして着いた先はいつも練習しているグラウンド。
粗末で簡易なベンチにどかりと腰を下ろすと、うつむいた暗くな
っているにもかかわらず、見慣れたダイヤモンド[△]さつきと田口
浮かんできた。

あそこがベース、あそこが一塁、ちょっと先に行くとそこだけ窪
みができるよく転ぶ。それで……それで……

涙が落ちた。

誰よりも練習している自負がある。バッティングは男子に負けな
いつもりだ。守備だって、最近任されたセカンドをしっかり守って
いるのに。

女には野球ができない。

それはなんて酷く、悲しいことだらう。

あたしは、あたしの名前を「野球」を逆さまにして訓読みした「
たまの」にした両親に苛々した。あたしに野球をさせた父に腹が立
つた。

そして何より、女に生まれた自分が悔しかった。

男になりたい。
でもそれは叶わない。
じゃあ野球はできない。

涙は後から後から零れて、なかなか止まらなかつた。

何とか止めようとして拭つたコニーフォームの袖がびちょびちょになり、皿はひりひりした。きっと明日ひどい顔になるなと思つたけど、やめようとはしなかった。

でないとまた世界がぐらぐらする気がした。

よしやく涙が引いてきて、ぼんやりとした頭で考えると、今までの野球生活が走馬燈のように浮かんできた。練習、試合、チームメイト、監督、キャッチボール・・・。それらは頭の中をくるくると回り、浮かんでは消え、浮かんでは消え...としていた。

最後の場面が浮かび、突然あたしの頭はすつきりとした。

そしてあたしは、野球を辞める決意をしたのだ。

走馬燈の最後に浮かんだのはもやじつー／＼ペッチャー、荻原孝文の満面の笑みと、

『また野球やろうなー!』

といつづけた言葉。あたしには聞かれてしまった、未来を約束する言葉だった。

ダイヤモンドがカシャンと音を立てて歪んだ。

野球をやめたあたしは髪を伸ばし始めた。

中学三年間で多少切つたりしたけど肩より上にしたことは無くて、高校に入学する今は一の腕と同じくらい。少し巻いて、栗色だ。部活に励んだり（バドミントン部だった）、女友達と服を買ったり、彼氏とデートしたり。結構楽しい中学生活を送つて、高校もそれなりに楽しむ予定でいる。彼氏とは別れちゃったから、新しい恋の予感とか・・・ね。

今日は入学式。あたしは県内でも有名な進学校に入った。野球部は県内一弱小。それがあたしにはとっても魅力的だった。

クラス分けが掲示され、自分のクラスを確認したあたしは、うきうきと教室に行き出席番号順の席に座つた。

すると前の席にはもう人が座つていて、あたし結構来るの早かつたのにな、とちょっと悔しかつたり。まだ入学式の一時間前だ。教室にはあたし達二人の他にまだ誰も来ていない。

前の人の中名は確認しなかつたけど、あたしは如月で“力行”だから、“か”のつく名字の人か“ア行”の名字の人だとは分かる。その人は男子の制服を着ていて、身長も結構高い。細いけどしっかりした体格で、何かのスポーツをやつているのは一目瞭然だった。バスケか、バレーか。はたまた弓道とか。

あたしはその人に興味が湧いてきて、思わず背中をとんとんと指でつついた。

「あの、すみません。初めまして」

その人がぴくりとした。何故か振り向かない。

不審に思いながらも、あたしはそのまま話しかけた。

「えっと、あたし如月たまのつていうんだけど、今日から後ろの席になつたんです。よろしく」

そう言つても振り向く気配がない。

「……よろしく」

と低音でややハスキーな声で返事をしたのみ。しかも不機嫌そうだった。

もしかしてつづりたいと思われてるのかな、と思い、あたしは即座に謝つた。

「「めん、…つづかつた？」

「あ、「めん。もうこうじやなくて…」

“うわー”といつのは急いで訂正した那人。でも言葉尻は濁して、なんだかはつきりしない。

このはつきりしない物言い、なんだか似た奴が居たような。

「じゃあ何? どうしたの? もしかして具合悪い?」

少し心配になり、あたしは席を立ち上がりて身を乗り出すると、その人の顔を覗き込んだ。

直後、

「うわあつーちょ、待つてたんまーまだ心の準備が…」

とその人は体を反転させ、顔を腕で覆い、あたしから見えないよう隠している。

何なんだ一体。

初対面でこんなことをされるのは初めてで、正直腹が立った。

「・・・何で顔見せないの」

「いや、ほんと」めん。心の準備がついてなくて」

「心の準備とかいろいろよね、顔見せるのに。何?赤面症なの?それとも単に恥ずかしがり屋?あ、もしかしてあたしのこと知ってる?そしてあたしのこと嫌いとか?何それそういうことかよそんなら早く言え!」

苛立ちが募り質問しているうちにボルテージが上がってしまった。最後はほとんど怒鳴っている。

まだ誰も来ていないくて良かつたと心底思つた。

「わ、ごめん……嫌いとかじゃなくてさ、」

「じゃあ何!」

「…………はあ。分かった。じゃあせ、如月も心の準備しりよな

いきなり名字を呼び捨てにされたが、それは興奮していて気にならなかつた。むしろ特大ため息の方が気になつた。

「おひょーしてるやー。」

「やつ勇ましく答えると、その人は再び大きなため息を吐き、ゆつくつと口を開いた。

「俺は荻原孝文」

「……は？」

「だから荻原孝文だつて」

「いやいや何言つてんの。そんなわけ、」

するとその人が腕を下ろした。現われた顔を見ると、ちょっと口に焼けていて、あたしに向けられた真剣な眼差しは、眼差し……

左目の下に、泣きぼくろが二つ。

心臓がどくんと大きく鳴った。

「……う、そ」

「嘘じやないよ。お前は如月たまのだろ。三番、セカンド。俺からホームラン一号取つていつた如月」

「え、そうだけど、でも」

「何で野球辞めたんだ」

「……」

「…もうすぐ人が来る。」
「だとゆつくり話せないし、グラウンドに行こう」

断ろうとしたけれど、それよりも早く荻原孝文があたしの腕を掴んで引っ張っていた。

有無を言わせない力。

あの頃のこいつには無かつた力があった。

あたしはただ引っ張られるままに、グラウンドへ行つた。

「さすが県内一の弱小部。グラウンド超閑散」

荻原孝文が苦笑いしながら言つた。グラウンドに背を向け、フーンスに体を預けた。目は少し離れたところに立つて、あたしに向けられている。

あたしは荻原孝文の後ろに広がるダイヤモンドにちりりと一瞥を向けると、そのまま荻原孝文へと視線を移した。

「……あんただつたら、強豪校の推薦一杯来てたんじゃないの？」

「知ってるんだ」

「偶然ね」

知つているも何も、あたしは荻原孝文の野球情報には結構詳しい。それというのも元チームメイトで同じ中学に入った奴らが、荻原孝

文の情報を逐一あたしに伝えていたからだ。

そいつらは何でだか知らないけれど、あたしが野球を突然辞めてしまったのが嫌で、しかも小学校最後の試合でたまたま荻原孝文のチームと再戦した際、荻原孝文に「あれ、如月は？」とか訊かれたのをずっと気にかけていたらしかった。多分、荻原孝文がまだあたしのこと好きでいるとも思い続けていたのかもしない。あたしがバスケ部のエースと付き合つた時なんか激怒していたから。

「お前、荻原が泣くぞ！」

「付き合つならせめて野球部にしろ！他のスポーツは敵だと思え！」

とかなんとか。

その時は「あたしバド部だし、じゃあ敵だね」と返したらもう何も言わなくなつたけれど。

とにかく、そのせいで知りたくなくても知つていてる。

中学最後の大会では優勝したとか、速球ピッチャーとして結構注目されていたとか、県内外の強豪校からの推薦が跡を絶たなかつたとか。

・・・まだホームランは打たれていないとか。

そんなことが頭に浮かんで、あたしは振り切るよつと口を開いた。

「何で、こんな高校に来たの？」

「うん」

「うんじや分かんないよ」

「うん……」

そう言つたきり、荻原孝文は黙つてしまつた。

いつの場面で黙つてしまつのは彼の癖なのだろうか。
そして黙つた後は決まって、大事なことを言つのだらうか。
それは彼が昔と変わつていなければの話だけだ。

「何、早く言つてよ、入学式始まつちやうから」

待つてこる義理もないでのそつ急かした。

実際あと三十分程で入学式が始まる。早く教室へ戻らないと、“
入学初日”という友達を作るチャンスをも減らしてしまふかもしれ
ない。

「…何での時野球辞めたの？如月」

「・・・」

やつぱり大事なことだった。

昔と変わらない荻原孝文に少し安心しつゝ、今度はあたしの黙る
番となつたことに気づき苛つべ。

思わず舌打ちをした。

「…別に、どうだつていいじゃん。あたしが野球辞めたつて

「よくねえよ」

「関係ないでしょ。はい、話これだけ？じゃわかつて教室戻るよ」

そう言つて背を向けた。

教室へ歩きだそととしたあたしは、それが叶わなくなつて、荻原
孝文を見た。

彼があたしの手をがつちりと掴んでいたのだ。

でもやつさとは違う。流されたくはなかつた。

思いつきり手を引つ張つて手が離れるようにしたけれど、荻原孝文の手は離れない。

握力が強いんだ、と間抜けなくなりい場違に思つた。

痛いくらいに強い力。

あたしとは違うんだ。途中で野球を投げ出したあたしとは全然違う。

こいつは、荻原孝文は、今までずっと練習して試合してを繰り返して、野球と向き合つてきたんだから。

あのダイヤモンドの中で野球をしていたんだから。

諦めたあたしとは、違つよね。

「え、ちよ、めん！ 痛かつた！？」

「へ・・・？」

急に慌てて手を離した荻原孝文。何で慌てているのか分からなくて、あたしは首を傾げる。確かにちよつと痛かつたけど……。

「だつて泣いてるから」

「え」

自分の田元に手を当ててみると、水に触れた。本當だ、あたし、

泣いてる。

言われて初めて氣がついた。

「あれ、何でだらう」

涙は自覚した途端ぼろぼろと零れ、止まらなくなつた。

あの日以来泣いていなかつたから、もしかしたらその分もまとめて出できちやつたのかもしれない。

落ちた涙が地面にしみを作るまでにそんなに時間はかからず、あたしは制服の袖で目を擦つた。新しい制服だけどそんなの気にしていられない。

ハンカチは教室にあるバッグの中だし、とにかく涙を止めたかつた。

それに荻原孝文に見られているのもちょっと嫌だ。

「え、ビリシよ、まじめん、えつ」

・・・・・慌てられるのも嫌だ。

「…とりあえず、これ使って！」

そう言つて差し出されたのは、青いハンカチ。彼はピッチャーだというのに頭をかすめ、泣いていたにもかかわらず途端にあたしは吹き出した。

「ぶ、あは、は、ハンカチ王子……！」

「るつせこな……使わないならいいけど」

「じめんじめん、使う。使つよ」

遠慮なくハンカチで目元を押さえ、水分を吸い込ませる。ほんのりとだけど、荻原孝文の匂いがして氣恥ずかしかつた。

でも拭つても拭つても、やっぱり涙は流れてきて。

「……ほんと、どうしたんだよ」

今度は心配されてしまった。自分でも分からなかつた。何でこんなに涙が出てくるのか。

自分で困惑しているあたしに気付いたのか、荻原孝文は少し黙ると、一つ小さな息を吐いて、意を決したようにあたしに眼差しを向けた。

「なあ、野球辞めた理由……聞かせてくれない？」

その時ちょうどチャイムが鳴り、あたし達は互いに顔を見合わせ、苦笑した。おそらく体育館への入場が始まる時間だ。今から戻つても恥ずかしいだけ。
あたしはもう話すしかないらしい。

…そして、あたしは『野球』と向き合わなければいけないみたいだつた。

「…ちよつと悪くなるけど」

「うん。いいよ」

「ありがとう。…………あのね、昨日、凄く嬉しかった」

「へ、うん……」

荻原孝文は、僅かにはにかんだ。その顔はとても幼く見えて、ちよつと懐かしくなつた。

「また野球やめられて言つてくれたのも、凄く嬉しかつた」

「うん…」

「あたしずつと野球やるつもりだった。中学でも高校でも、大人になつても。でもね、あたしその夜に分かつちゃつたんだ。その時まで知らなかつたのもどうかと思うけどね」

少しだけ間を置いて、氣分を落ち着かせる。涙がまた少し零れた。

「女は野球ができないんだよ」

「・・・」

「女は野球ができない。試合に出られない。投げられない。守れない。打てない。許されていない。……悲しかった。男子より練習してたつもりだつたし、負ける気もしてなかつた。でも、本当はそれ以前の問題だつたんだね。どんなに素振りしてもさ、試合に出られないとしたら意味ないよね。無駄だよね・・・だから、辞めたの。野球」

同じようにあたしもフェンスへと歩み、それに体重をあずけた。

「それに、あんたの球も打てないしね。それじゃ意味がない」

精一杯にやりと笑つてみせた。ただ、泣いているからちょっと格好がつかない。

でも荻原孝文はあたしを真剣に見つめていた。だからあたしも視線は外さない。

「正直ね、あたしはあんたがちょっと好きだった。あんたの投げる速球も好きだつた。凄いと思つたし、何度でも戦いたい、ぶつかりたいと思つた。それに……そんな球を打つた自分が少し誇らしかったの」

「・・・でも、野球はできない」

「そう。どうあがいたつて駄目。ソフトとかマネージャーっていう道もあつたけど、それじゃ益々意味ないしね。あたしがやりたいのは野球。でもあたしは女だし、男にはなれない。あんたとはもう野球ができない・・・辞めるしかないでしよう?」

涙はいつの間にか止まっていた。あたしは青いハンカチをたたむ。もう話すことも無いし、正直話すこと自体が辛くなつた。
『野球』と向き合おうと思つたけど、話していくもつと分かつた。女は、あたしは野球ができないって。
これ以上は意味がないように思えた。ここに留ることも、ここにと向き合つていることさえも。

荻原孝文に教室に戻ろうと言おうとした、その時だ。
突如、横からガシャーン!という派手な音がした。
荻原孝文がフェンスを拳で殴つたのだ。
あたしは驚いて、思わず体を引いた。対照的に、カシャンと小さな音がする。

「俺は!俺は……っ、如月とまた野球がやりたい」

絞り出すよくなかすれた声でそう呟いた荻原孝文は、眉間に皺を寄せて、苦しそうな顔をしていた。

そんな顔をしても、事実は変わらないのに。

「だから言つてるでしょ、駄目なんだって…」

「・・・俺がこの高校に来たの、実は如月と野球やるためなんだ」

「へー？」

いきなりの言葉に、あたしは拍子抜けした。
強豪校からの推薦を蹴った理由つて、それなのか、それでいいのか。

「何でだか知らないけど、お前が野球辞めてしまも野球と俺を完全に避けてるみたいこと言われたんだ。お前の元チームメイトにさ」

あいつら……と、思わずため息が出た。

その余計なトリビアが、こいつの野球人生を狂わせたように思われてならない。

「俺はそれを聞いて、とにかく如月の事情っていうか、本音が聞きたくなつて……で、高校は絶対野球部弱いこの高校に来ると思ったんだお前は。カンで」

「カン！？外れてたらどうしたの」

「その時はその時。でも結果として大当たりだから万事オーケー」

「いやいや。・・・あ、で、”心の準備”になつたんだ」

「うん。めっちゃ緊張した。どう話しかけようか迷つてて、そした

らこきなり一人っきりになるし。困った…しかもお前から話しかけてくるしな。心臓ぢぢんだ」

「…『めん』

「ほんとにな。俺の苦労は何だつたんだって。でもこうして話せたし、お前が野球辞めた理由も聞けたし…ついでに如月が泣き虫なのも新発見で大収穫？」

そしてやりと笑うこいつ。

その笑顔に心臓がまたどくんと鳴つて、かなり不本意だ。

・・・あたしはまだこいつのことが好きなのかもしねり。ううん。むしろ、ずっと好きだつたのかもしねり。

だつて焦がれたのは、ダイヤモンドと、野球と・・・。

「それに今の話聞いたら、女が野球諦めなくちゃならないって知らなかつたあの時の俺も悪かつたんだつて分かつたし。それは本当に悪いと思ひ。『めんな、如月』

「いいよ、そんなこと…」

あたしの言葉を聞いて、荻原孝文はくすりと笑みを漏らした。おそらく、「ありがとひ」とこいつのが込められてこるのだろう。凄く優しい笑みだつた。

またぐりとする。

「・・・俺如月とまた野球がやりたかったんだ。どうしても。如月が野球辞めてからずっともやもやして。とりあえずがむしゃらに野球やつたけど、お前みたいな豪快なホームランには出会えなかつた。不完全燃焼だな。だからずっとお前のスイングと、お前のことが忘

れられなくて……それで、ええと……

荻原孝文はそう言つたきりまた黙り込んだ。

今度は何を言つのだろう。

また大事なことを言つのかな、荻原孝文。

「その、俺まだ、つてかずっと…如月のこと好きなんだ」

やつぱり大事なことだった。

荻原は、あの時みたいに真っ赤にはならなくて、静かに微笑んだだけ。

だからあたしも静かに微笑みを返した。

言葉はすぐにするりと口から出てきた。それはあたしがずっとしまっていたものだったのだろうか、或いは諦めていたものだったのだろうか。

とにかくその返事はまるで用意していたようにすんなりと発せられたんだ。

「あたしも、荻原と野球がやりたい。荻原が……好き」

そうして一人ではにかんだ。告白の照れくささと、想いが通じた嬉しさと。

随分変な道を辿ったけど、あたし達はやっとあの時に戻った気がした。

また始められるんだ、荻原と。
野球を。

・・・しかし課題が一つあるのを忘れてはならない。あたしは女なのだ。

「でも野球、やれないよね」

「何で？出来ないじゃ。IJK弱小だしさ、混ざればこと思つ」

「きなり突飛なことを言つ荻原。その発想は一体どこから来るのだろう。」

「いややうこいつわけ」も……」

「ある程度実績があるとIJKなら女子イコール黙目、ってなるけどKJの高校は実績無。試合に出る予定もない。何故なら部員は

「五人」

「お、やつぱり調べてたんだ」

「重要でしたから」

「だからさ、まず第一に部員数確保なわけだ。で俺と如月が入るだろ？それで七人。あ、でも俺のチームメイトが一人ここに来てるんだ。そいつらも入るかもしねーし……それで九人か。まあ練習試合くらいならできるか？」

荻原はうんうん唸りながら考え始め、そこまで真剣だったのかと今更に呆れた。

「荻原さん、推薦蹴つてまでしてあたしと野球したかつたですか

だから思わず聞いてしまった。

「 もちろん。 なんたつて俺のホームラン一弾をかっさらつていった
運命の人でしたから」

すると荻原は満面の笑みを浮かべ、何の恥ずかしげもなくそういう答
えた。

その笑みはまるであの時のものよつで、素直に嬉しくなつた。
そこまでしてあたしとの野球を望んでくれた荻原にも本当に“感謝
”の一言だ。

「 ょし、ノープランだけどなんとかなるishyo」

「 うんせうだね。 なんとかなるーでもとりあえず入学式かなー」

「 あ、忘れてた」

「 今から行つたらかなりの重役出勤。 つてか式はもつ終わつてるで
しょ、これ」

腕時計を見てみると、もう式開始から一時間は経過している。 終
わつてもおかしくない。

「 じゃあホームルームか。 うわ、一人そりつて登場とかすげえ怪
いな」

「 でも荷物は教室だし仕方ない。 時間ずらしても変だしね。 ここは
ひとつ、腹をくくるか孝文」

「 ・・・仕方ないな。 やつするか、たまの」

そうして、あたし達は教室へと歩きだした。 体重をあずけていた

ファンスから体を離すと、カシャンと音がして。

ふと振り返つたあたしは、視界一杯に、春の陽光に照らされたグラウンドを見た。

眩しいくらいのその場所は、もう歪んだりはしなかつた。

とりあえず髪を切ろう。

あの頃みたいにベリーショートにして。髪の色はそのままに戻る。そこで、あの日段ボールに突っ込んで押入れの隅っこに詰め込んだグラブとバットとボールを出そう。グラブはカビが生えてるかもしれないけど、まあなんとかなる。

あとお父さんに報告しようかな。あの時みたいに、突然「野球またやるから！」って。今度は「告白された」じゃないだけましだと思つ。実は両想いになつたんだけど、それは今回秘密。

さあ、忙しくなる。

また野球を始めよ。

ねえダイヤモンド。あたしはあんたが嫌いになつたんだ。あんたはあたしを受け付けないものだつて分かったから。そこに居られるのはお情けだつて、そうあんたが言つてゐる気がしたから。

でもやっぱり諦めきれないよ。

あたしはダイヤモンドが好きだ。そこで動き回るコニーフォームも、

飛び交う白球も全部。あなたの手中である野球は最高に面白くて楽し
いって知っているから。

いくら拒絕したって、やうすれば必ずあなたに焦がれてしま
つたんだ。

だから今度はぶつかってやるよ。

どんなに捕まれても弾かれても、あたしは諦めない。

ねえダイヤモンド。

あたしの憧れをどうか許してね。

そこで、最後まで足搔かせてよ。野球と向き合わせたいよ。

ねえ、ダイヤモンド。

(後書き)

「とにかく、あめいと申します。

今回は少し長めのお話を書かせて頂きました。

私自身が野球好きでして、どうしても野球のお話は書きたいなあと思っていました。

それでこの「憧れのダイヤモンド」を書きました。

いかがでしたでしょうか。

私の技量の稚拙さ故に読みづらかったと思つます。言いたいことが伝わりにくかつたとも思います。

ですが、この話を読んで「野球つていいな」と思つて頂ければ幸いです。

また、野球について多少の矛盾点があるかもしません。

私は野球が好きですが、ルール等に明るい訳ではありません。もし間違っているところを見つけられた方は、私の方まで「報告して頂けると嬉しいです。すぐに修正したいと思います。

では、ここまで読んで頂き本当にありがとうございました。
感想等頂ければ至福の極みです。

ありがとうございました。

あめい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0997d/>

憧れのダイヤmond

2010年11月27日00時37分発行